

また、テレビを長時間視聴している小・中学生の小学校入学ころの親子関係を見ると、抱いたり、ほおずりをしたり、本を読んでもらったりという、こまやかなスキンシップを経験している物が少ない。

つまり物理的に親子で一緒に遊んだり、本を読んだりするかわりにテレビを見ていたとも考えられ、テレビ視聴習慣化する素地を作っていたものと考えられる。親子のスキンシップの欠落は情緒性の発達の上で何らかの影響が大きくなってから（小学校高学年～中学校）テレビ視聴を促進しているとも考えられる。

また、現実テレビ視聴の長い物は友達との交際が少なく、人とのつきあいを通して得られる情緒的体験が乏しいと考えられる。

また、テレビ視聴により子どもたちは笑い、悲しみ、恐怖、不安などさまざまな間様の変化を消位県するがそれらの消位県はいわばテレビという虚構の枠の中でのもので、自らが同じ事を実際に行ってきたときに得られる体験的感情とは異なるように思われる。

長時間テレビ視聴は人も物質視する傾向を強め、他人への感情移入ができにくいのではないか。

#### 文献と本研究の関連で注目した点

- ①結果は思われる、で結ばれている物がおおく、推測の域を出ていないが、今回の調査においても友友好的な推測と思われた。
- ② テレビ視聴ではないが、近年話題になっているテレビゲームなどと生活行動の関連
- ③ 今の子どもの生活時間とテレビ視聴を含む遊び時間と質について（生活リズムの把握と滞在場所）。
- ④ 当時のこどもとの生活との比較により、「昔は良かった…的印象」は本当なのかを多角的に考察。
- ⑤この調査対象者は現在30歳前後を迎えている。あと10年経過するころには調査対象者だった人に小・中学生のこどもがいる年齢になってくる。どのような価値観で子どもに接するのだろうか？

興味のある文献リスト：キーワード：生活時間、居住環境、子ども

論文題名 著者 雑誌名 巻号 始頁 終頁 発行年

- 1) 大都市ニュータウン在住の雇用労働者夫妻の生活時間と生活様式 (第3報) 長時間労働が家庭生活に及ぼす影響 森ます美・他 日本家政学会誌 38-11 1009-1022 1987
- 2) 自由時間における生活行動意識 総理府 世論調査 14 2 2-37 1982
- 3) 生活リズムと時間設計 田中洋一 保健の科学 26 7 483-486 1984
- 4) 都市勤労者の夫妻の生活時間・生活行動 (第1報) 伊藤セツ・他 家政学雑誌 34 7 411-420 1983
- 5) 日本人の生活時間 その現状と変化 国民生活時間調査プロジェクト NHK 放送研究と調査 36 6 2-15 1986
- 6) 現代人の生活時間 斉藤賢治 公衆衛生 51 5 302-306 1987
- 7) 生活時間の国際比較 鈴木泰・他 NHK 放送研究と調査 37 6 2-13 1987
- 8) 小・中学生のテレビの長時間視聴と日常生活行動との関連について 内山絢子 科学警察研究所報告 24 1 78-90 1983
- 9) 子どもの生活時間構造 江口篤寿 保健の科学 26 7 466-471 1984
- 10) 子どもの生活時間 深谷昌志 子どもの看護 4 47-52 1985
- 11) 幼児の生活習慣についての親の意識に関する一考察 幼児の生活行動に要する時間との
- 12) 関連において 秋山和夫 岡山大学教育学部研究集録 68 1-14 1985
- 13) 子どもの生活時間 鈴木陽子 小児医学 18 4 620-640 1985
- 14) 子どもの生活時間とその変化 鈴木泰 青少年問題 31 11 14-21 1984
- 15) 多摩ニュータウン在住雇用労働者家庭の子どもの生活時間 瀬沼頼子, 大竹美登利 日本家政学会誌 40 5 327-333 1989
- 16) 団らん空間に影響を及ぼす諸要因に関する研究 (第3報) 生活時間・生活行為からみた団らんの実態 太田さち, 河野安美, 國嶋道子, 梁瀬度子 日本家政学会誌 40 1 69-73 1989
- 17) 子どもの遊びと生活時間 内山源, 小高邦雄 学校保健研究 22 6 267-277 1980
- 18) 子どもの遊びと生活時間 江口篤寿 学校保健研究 25 8 352-359 1983
- 19) 保育園児の「食」に関する生活時間 金子俊, 山口蒼生子, 大谷八峯, 山崎文雄, 後藤玲子, 鈴木文子, 藤沢良知 栄養学雑誌 43 1 13-20 1985
- 20) 新しい生活時間調査用ソフトウェアとその日常生活活動調査への応用 西原照代, 香月文子, 堀美津代, 加川稚桂子, 奥田誠子, 宇津知子, 米田伊津美, 那須正夫, 米田該典 栄養学雑誌 46 2 73-84 1988
- 21) 社会の変化と子どもの生活リズム 時間についての社会化 山村賢明 教育心理 33 9 12 15 1985 69437
- 22) 「家族の生活時間と労力」の授業展開 生活構造的視点より 渡部美恵子 家庭科教育 56 12 56-60 1982
- 23) 子どもの生活時間と健康な発達 内山源 家庭科教育 58 2 89-92 1984

- 24) 「家族・家庭生活」領域の小学校と中学校の連続性に関する考察 生活時間, 家事労働, 団らんを中心に 櫛田眞澄, 小幡恵子, 小林清子 岡山大学教育学部研究集録 89 107- 117 1992
- 25) 生活時間の国際比較の方法と問題 横山滋 家庭科教育 62 7 12- 17 1988
- 26) 疲れ果てている子どもたち 子どもの実態 奈良・中学 生活時間調べより 中嶋たや 家庭科研究 84- 20 1991
- 27) 疲れ果てている子どもたち 子どもの実態 東京・小学校 自分や家族の生活時間 高野敏子 家庭科研究 84 24- 26 1991
- 28) 研究 保育園児 (3~6 歳児) にみる生活時間の変化 山口蒼生子, 金子俊, 大江秀夫, 大谷八峯, 後藤玲子, 二見大介, 山崎文雄, 藤沢良知 小児保健研究 53 3 471- 478 1994
- 29) 調査レポート 学校週 5 日制 中学生調査から 第 2 章 生徒たちの自由時間・日常生活 深谷昌志 モノグラフ中学生の世界 52 13-18 1996
- 30) 子どもの生活と家庭のあり方はどう関連するのか 東京私保連・夜間長時間保育研究会の生活実態調査をもとに 鈴木佐喜子 現代と保育 34 170- 188 1994
- 31) 乳児保育の今日的課題 子どもの生活実態と保育の課題 東京私保連 夜間・長時間保育研究会の調査・研究を中心に 鈴木佐喜子 保育の研究 13 17- 29 1994
- 32) 個別研究 親と子の生活に関する調査 (第 3 報) 父親の就労時間と子育ての影響について 齋藤幸子, 高野陽, 高橋種昭, 窪龍子, 井狩芳子 日本子ども家庭総合研究所紀要 35 221-226 1998
- 33) 集合住宅居住者の実態と住環境条件に対する意識の研究 (第 3 報) 島田裕子・他 家政学雑誌 31 8 603- 608 1980
- 34) 集合住宅居住者の実態と住環境条件に対する意識の研究 (第 4 報) 志水暎子・他 家政学雑誌 32 3 226- 232 1981
- 35) 住宅環境と子どもの遊びの満足度 北浦かほる・他 大阪市立大学生生活科学部紀要 29 163- 182 1981
- 36) 住環境が子どもに与える影響 早川和男 教育心理 37 11 46-47 1989
- 37) 子供の性格形成と家庭環境に関する研究 高層密集住宅地域の調査からの考察 高橋種昭, 野田幸江, 中一郎 日本総合愛育研究所紀要 12 183- 199 1977
- 38) 子どもを取り巻く住環境がおかしい!? 岸本幸臣 健康な子ども 15 5 6-9 1986
- 39) 家族と住環境ストレスに関する研究 (1) 集合住宅の家族に関する分析 山内宏太郎 白百合女子大学研究紀要 26 13- 30 1990
- 40) 特集 環境と子どもの健康 高層住宅のお母さんと子どもはちょっと違う!? 織田正昭 愛育 55 12 18- 21 1990
- 41) 居住環境と子どもの健康に関する研究 松田一郎 生活環境が子どもの健康におよぼす影響に関する研究平成 4 年度研究報告書 松田 一郎 11 31 1993
- 42) 子どもと住居 東孝光 日本家政学会誌 38 1 83- 86 1987

- 43) 子どもの生活意識と生活空間との関連 住空間の分析 7 尾上孝一 大妻女子大学家政学部紀要 21 53- 62 1985
- 44) 子どもの生活と『家』生活との関連について 住空間の分析 (8) 尾上孝一 大妻女子大学家政学部紀要 22 53 -60 1986
- 45) 住居学の在り方と役割 子ども部屋をめぐって 外山知徳 家庭科教育 59 13 13- 17 1985
- 46) 子ども部屋に関する研究 (第 2 報) 3LDK 型集合住宅における子ども部屋の与えられ方と母親の評価 中島喜代子 日本家政学会誌 39 3 225- 232 1988
- 47) 高層階居住による子どもの遊びへの影響 高島平団地の場合 新田米子 奈良女子大学家政学研究 27 1 35- 42 1980
- 48) 子どもの生活と家生活との関連について 住空間の分析 (8) 尾上孝一 大妻女子大学家政学部紀要 22 53- 60 1986
- 49) 多摩ニュータウン在住雇用労働者家庭の子どもの生活時間 瀬沼頼子, 大竹美登利 日本家政学会誌 40 5 327- 333 1989
- 50) こころ豊かな家庭 子どもを生かす住環境・子どもに生かされる住環境 中島明子 児童心理 45 6 118- 122 1991
- 51) 住まいと子ども 住環境がもたらす子どもへの影響 中村攻 厚生 45 7 26- 29 1990
- 52) 子どもの遊びと高層集合住宅 山本清洋 児童手当 22 1 2- 4 1992
- 53) 子どもたちの健康と居住環境について 逢坂文夫 児童手当 22 5 5- 7 1992
- 54) 研究 子どもの遊び・運動に対する高層住宅居住の母子の意識に関する母子保健学的研究 織田正昭, 平林みゆき, 日暮眞 小児保健研究 58 3 399- 404 1999
- 55) あそび環境要素からみた計画集合住宅地におけるこどものあそび構造、谷口 新, 仙田 満, 矢田 努, 水谷考治、日本建築学会計画系論文集 NO.518 P.89 1999年4月
- 56) 計画集合住宅地における日当り・日影とこどものあそび場に関する考察、谷口 新, 仙田 満, 天野克也, 梅干野 晁、日本建築学会計画系論文集 NO.531 P.87 2000年5月

分担研究（レビュー研究）

## 7. 文献紹介「Social-skills Training

プログラムの実際」

（分担研究者 加藤 則子）

思春期の暴力行為の原因究明と対策に関する研究

分担研究報告書

## 文献紹介「Social-skills Training

## プログラムの実際」

国立公衆衛生院母子保健学部 加藤則子

出典書籍：

ANNALS OF THE NEW YORK ACADEMY OF SCIENCES Volume 794 September 20, 1996  
UNDERSTANDING AGGRESSIVE BEHAVIOR IN CHILDREN

(ニューヨーク科学アカデミー紀要 794 巻 1996年9月20日)

(小児の攻撃的な行動の理解)

この書物は1995年9月29日から10月2日まで ニューヨーク科学アカデミーにおいて行われた会議の記録である。

書物のねらい： 小児の攻撃的な行動に関しては、神経、行動、医学、心理、社会、倫理各分野から科学的接近が進歩してきている。これにより、小児の攻撃的な行動を理解し、予防し、変化を与えることが期待される。

書物の構成： 攻撃性の生物学的側面／セロトニンとストレス／心理社会的相互作用／パーソナリティと攻撃性／心理社会的介入

以下に抄読する論文は「心理社会的介入」の章に含まれている。

**Integrating Social-skills Training Interventions with Parent Training and Family-focused Support to Prevent Conduct Disorder in High-risk Populations: The Fast Track Multisite Demonstration Project**

(リスク集団において行為障害を予防するための親のトレーニングと家庭支援による包括的ソーシャルスキルトレーニングによる介入)

**KAREN L. BIERMAN AND THE CONDUCT PROBLEMS PREVENTION RESEARCH GROUP** Department of Psychology, The Pennsylvania State University

(KAREN L. BIERMAN と行為問題予防研究グループ、ペンシルバニア州立大学心理学教室)

行為障害 (Conduct Disorder) は、初発年齢が低いと重症となる。短期間の介入研究はあり、その効果は認められているが長期予後は良くない。攻撃的な行動の背景は多様 (感情制御、認識等) である。

行為障害の発生経過としては、就学前から許容がなく、癩癪傾向にあり、親とのつかみ合いもある一方、親の対応の影響も大きい訪うの特徴がある。

親の行動の特徴としては、強制的であり、避けたり、敵対しがちである。社会的環境の影響も大きく、行為障害を伴う小児は仲間を作る。子どもは社会化を阻害され、ともすると低学力を伴う。この場合複数のスキルの充足が必要である。

介入デザインの実体化の方針としては 1. 攻撃的行動の減弱だけでなく、人間関係や認識、情緒も注目する 2. 人間環境の長期影響を重視する 3. 発達段階に応じ継続的で柔軟

で包括的な対応を行う 等があげられている。

Fast Track Program の実際としては、まず、地理的人口学的に偏りのない地域を選定し、幼稚園時に行動問題のあった群（介入と非介入にさらに分かれる）と問題行動なし群の3コホートを設定し、小学校の1,2年でスタートする。

社会スキルトレーニングでは、授業で学級の中で振る舞うスキルを学び、クラスの雰囲気も良くなる。問題行動児へのグループでの介入では、怒りへの対応や、人間関係の解決に関するスキルを学ぶ。学業指導では、読みのスキル、音声への集中のスキルを学ぶ。

家族への介入プログラムは 1.親であるための問題解決型接近 2.半時間の親子の時間 3.家庭訪問をし、個別ニーズに対応し、ライフイベントの対応やエンパワメントを図る等の要素からなっている。

介入の実際では、週1回を22週間続ける。兄弟の保育サービスを設ける。5,6人の子どもグループやその親のグループで2時間過ごし、親子の時間を0.5時間設ける。

評価計画としては、仮説：小学校での介入が思春期行動の問題をやわらげる、子どものスキルと親の姿勢が変われば子どもの行動が変わる等を仮説とし、評価指標（行動の状況）を複数の方法で設定し、環境の状況も把握する。さらに重回帰により子どもがスキルを獲得したり親の姿勢が変わることにより行為障害が減少する度合いを予測出来るようにする。

コメント：米国のこの介入プログラムの場合、幼児期から問題行動の出現するタイプを扱っている。わが国におけるいわゆる、「おとなしい良い子」ほど、あるきっかけで「キレる」行動に出るといふ現象への対応策を考えるに当たっては、この文献を参考にするだけでは充分とは言えない。

分担研究（レビュー研究）

## 8. 海外の文献研究

“幼児期のアタッチメントと思春期の行為障害による問題  
：反映する相関的要素の役割”

（分担研究者 福島 富士子）



## 海外の文献研究

国立公衆衛生院 公衆衛生看護学部

福島富士子

“ATTACHMENT IN INFANCY AND THE PROBLEM OF CONDUCT DISORDERS IN ADOLESCENCE:

THE ROLE OF REFLECTIVE FUNCTION”

タイトル

## “幼児期のアタッチメントと思春期の行為障害による問題 ：反映する相関的要素の役割”

### 行為障害の本質

#### 行為障害の定義と流行

おそらく児童と思春期の青少年のほかの問題よりも、行為障害の問題は保護者の関心の高いものだろう。かれらの発散行為 (acting out) は怒り (大声を上げる、愚痴を言う、癩癩を起こす) から人を恐がらせる、そしてテロ手段で脅迫する (物理的な破壊性、個人間の障害、殺人) までの範囲に及ぶ。あらゆるカテゴリーにまたがりながら、それらの行為は単独では起こらず、複合的な症候群として現われる。ここ数年の流行にみる論理的証拠を集積してみると、子供の悩ましい反抗的行為、たとえば不順、理屈っぽさなどは、思春期の反社会的な行為というより重大な形への発展的前兆であるということを示唆している。この様なグループに属する思春期の若者の発展的理解をこの論文は目的としている。

反抗的行為の問題の流行度は、比較的高く、5~10%の非臨床例が DSM 診断項目に適合する。より深刻な問題は、行為障害の診断においてより多岐、しかし同様に 2~9% (Costello, 1990 年) という流行度が見られることである。これらの数字は、われわれのほとんどの取り扱い件数の大きな部分を行為障害がしめているという臨床経験をほとんど反映しない (Kazdin, 1995 年; Sholevar, 1995 年)。男の子に有利になるような幼児期の明確な性差は、思春期になると行為問題を抱える女の子が顕著に増えることにより、著しく減少する。長期的な研究は児童期の初期から後期にわたって (Campbell, 1995 年)、児童期から思春期まで (Lahey et al., 1995 年)、そして思春期から成年期 (Farrington,

1995年) 行為障害が継続することを明らかに示している。また、行為障害になる危険性は世代をまたがって移動することが証明されている。(Huesmann, Leonard, & Monroe, 1984年)。

### 臨床的特徴

児童期発症タイプの行為障害は、少なくとも15の考えられる行為障害(例:いじめ、けんか、動物に対しての虐待、所有物の破壊、個人的な利益のためのうそ、学校をサボること)が10歳以前に見られ、(思春期になるまでは起こらない)障害という形をとるよりも顕著な症状であるとしている(思春期発症タイプについてはWaldman&Lahey, 1994年参照のこと)。2万人以上の児童を対象とした60項目に及ぶメタアナリシスによる研究を含む感染理論的研究は、大人への過度の不従順が完全な行為障害への発展への重要な前兆であると示唆している(Frick et al., 1993年)。これはパターソンとその同僚が提言した親の訓練モデルと一致している(Chamberlain & Patterson, 1995年, Patterson, Reid, & Dishion, 1992年)。

不従順は、また、これら多くの児童が経験する学術的な人間関係問題を説明する(Walker & Walker, 1991年)。これらの発見は、この障害における親子の人間関係の本質の重要性を明白にしている。攻撃性は著しい行為障害の早期の目印となる(Olweus, 1992年)。思春期の攻撃的な行為の実証として、見解が二分している;すなわち攻撃の区別として能動的に対して受け身的(Dodge, 1991年)、利己的に対して感情的(Vitiello, Behar, Hunt, Stogg, & Ricciuti, 1990年)、どちらかである。前者は知覚した挑発に対しての防御的であり、一触即発の制御できない反応であり、恐れや怒りを伴っている。後者は若者が何らかの利己的な結果をもたらす手段を与えるが、激しい感情を伴わない。けんかはうそをつくことと密接に相関関係があり、特に思春期においてうそをつくことは窃盗行為の前兆である(Loeber & Schmalin, 1985年; Stouthamer-Loeber, 1986年)。

### 行為障害の発展と社会的背景の相互作用

上記のような行為障害の一般的記述は彼らの發展的、状況的そして処置的な側面(Mash & Dozois, 1996年, McMahon & Estes 1997年)を見落としている。行為障害の行為的な現われは時間をかけて変化している。それらは性質、家族、ピア・グループそして学校や近隣住民などのより広範な環境をふくむ背景的な要素の範囲に強く影響を受けている。もっ

と重要なことに行為障害の発展は処置的であり、その背景及び発展的側面は時をかけて明らかになり、お互いに影響を及ぼし合う。親子関係は初期の行為障害によって不可避免的に歪められ、結果として親の反応によって悪化させられる (Coie & Dodge 1998 年、Hinshaw & Anderson 1996 年)。

### 興奮しやすい気質

早期発症児の発展的進展 (Patterson, Capaldi, & Bank 1991 年) または幼児期の発症児 (Hinshaw, Lahey, & Hart, 1993 年) の行為障害は、これらの相互作用を説明している。これらの児童は不従順や不機嫌などのあまり深刻でない行為障害から、攻撃、盗み、薬物乱用などの深刻なそれへ進行しているようである。反抗的な態度やけんかなどの顕在的な行為はうそや盗みなどの潜在的な行為よりも早期に明らかになるが、潜在的な行為は早期の問題を置きかえるというよりも詳細に説明する (Lahey & Loeber, 1994 年)。

一時的に幼児期の異常な活発さや怒りっぽさは児童期発症の行為障害に報告されている (Moffitt, 1993 年)。しがしながら本人固有の気質は思春期の行為障害との関連は弱い (Gaspi, Henry, McGee, Moffitt, & Silva, 1995 年)。したがって、気難しさは処理的な問題の一部であり、我々の観点ではアタッチメント論の枠内で親子関係の難しさを説明することは必須である。

### 社会認識

行為障害の原因究明においてより鍵となる要素は、Ken Dodge とそのグループがこのタイプの子供達に繰り返し示してきた社会認識スキルの欠如である (Crick & Dodge, 1994 年)。行為障害の子供たちは、社会情報を処理することにさまざまな困難を持っている。かれらはコード化能力の欠如 (encoding deficits)、つまりいくつかの社会的合図に注意を払う事が出来ず、異常に用心深い。かれらは深刻な被害者意識 (attributional bias) があり、しばしば他の児童が示すわけのない敵意のせいにする。かれらは社会的合図を誤って理解し、対立の解消法として彼らが生み出す対処法は質的にも量的にも貧しいものである。彼らは社会的問題に対して攻撃的な解決法を好み、このことは彼らのたびたびの攻撃的行為の説明となるであろう。重要なことにこれらの能力の欠如と偏見は早期の段階で現われ、プレスクールでの行為問題への発展及び発現を示している (Weiss, Dodge, Bates, & Pettit, 1992 年)。

我々の観点では、社会認識の欠如はによるインパクトへの仲介の鍵となる。特に行為障害に関連した認識の欠如は、子供に対する親の行為に強く相関関係がある。

## 親子関係

Patterson とそのグループは、いかに強制的な親子関係の循環がエスカレートし、究極的には実質的な割合として深刻な行為障害となるかを説明する証拠を集積した (Patterson, 1982 年 ; Patterson et al., 1992 年)。そのモデルはプレスクール期の不従順に対する無駄な管理がこの強制的な関係のサイクルの入り口である事を示唆している。強圧的な関係は児童期と成年期の双方においての攻撃的行為を補強し、継続させるだけでなく、子供が認知する人間関係の特定のタイプのモデルとなる (Campbell, 1991 年 ; Campbell, 1995 年)。

より最近の研究は、なぜ親が適切なしつけの方針を子供に課すのに困難を覚えているのかという明確な疑問に対して、予備的な解答を与えつつある。これらの親は子供たちの行為を誤って理解し、子供と家族相補にとって否定的な予測を持ち、子供の問題行為を深い理由が在るもので、彼らの親としての役割が果たせなかったからだと思いがちである (Baden & Howe, 1992 年 ; Johnston, 1996 年、Roberts, Hoe, & Rowe-Hallbert, 1992 年 ; Sanders & Dadds, 1992 年 ; Wahler & Sansbry, 1990 年)。親の子供の精神状態に対する鈍感さは、行為問題の両方に危険を及ぼす。実に行為障害の親とアタッチメントパターンが混乱している子供の親は、顕著に類似点がある。

## 非行への道

何が行為障害を持った子供を非行に走る青少年や犯罪に走る大人にしてしまうのだろうか。つながりはきちんと証明されている (Frick & Jackson, 1993 年)。変則的な親の行動以外の何かの関係しているといくつかの研究は示唆している。親のアルコールや薬物の乱用 (Wills, Schreiman, Benson, & Voccaro, 1994 年)、夫婦間の悩み (Cummings & Davies, 1994 年)、そして近隣住民の影響 (Attar, Guerra, & Tolan, 1994 年) を含む親による他のたくさんの要因が一因となっている。Loeber と Hay (Loeber & Hay, 1994 年) は、環境的要因の集約の強制的なモデルを提案した。ピッツバーグに住む若者は、初期の問題から非行に至る少なくとも 3 つの道を示した。(1) 頑固な反抗的行為から始まり、挑戦的態度や権力からの逃避に至る権力との対立、(2) 盗みやうそなど隠れた行為が法律に立ち向か

うまでエスカレートしていく、(3) 攻撃性が激しさを増していく。重要な事は一人の子供がこれらの道のうちひとつ以上を同時にたどる事もあり、初期の攻撃性を含む組み合わせの場合、それはおそらく一番致命的であろう。

幼児期のアタッチメントと幼児期の心理病理学恒常性による規制のバイオーソシヤル・メカニズムとしてのアタッチメント体系 John Bowlby によって広められた論 (Bowlby, 1969 年 ; Bowlby, 1973 年、Bowlby, 1980 年) は、密接による結びつきを形成することが人間全体の必要性であると主張している。初期の関係においての相互依存の状態がその核となり、それは人類を含めたおそらくすべての哺乳類において正常な発達の前条件である (Hofer, 1985 年)。近くにしようとすることや微笑み、まわり付きなどの人間の子供のアタッチメント行為は、接触、抱擁、安心させるなどの大人の愛情行為によって報いられ、これらの反応は子供の特定の親へのアタッチメント行為を強くする。アタッチメント行為の活発化は子供の安心感と不安感の経験の結果となる環境的シグナルの範囲における子供による評価による。安心感の経験は市場体系の到達点であり、感情的経験の最初でかつ重要な規定者となる (Sroufe, 1996 年)。この意味において、精神的な障害のあらゆる形の底流にアタッチメント体験がある。

だれも自分自身の感情を規制する能力を持って生まれている訳ではない。機能的な規制体系は子供の状態の変化のサインが理解され、保護者によって応えられることで発展しより規制される。幼児は保護者の前での目覚めは、彼の模倣の能力を超えた混乱を引き起こすものではないことを学ぶ。コントロールできない奮起の状態の時、幼児は落ち着きと恒常性を取り戻そうと保護者に物理的に近づこうとする。最初の一年が過ぎるころ、幼児の行動は目的を持ったものとなり、特定の期待が込められている。保護者との過去の経験は、Bowlby (1993 年) が内的ワーキング・モデルと名づけたように、表現体系にあつめられる。

幼児期におけるアタッチメントのパターンアタッチメント論の二番目の偉大な開拓者は Mary Ainsworth (1969 年 ; 1985 年 ; Ainsworth, Bellar, Waters, & Wall, 1987 年) であり、彼女は有名な研究に基づいた幼児の行動時の内的ワーキング・モデルを観察する手続を発展させた。なじみの無い状況で保護者から短時間引き離された幼児は、4 つの行動パターンのうちのひとつを示す。保護者の前で不安なく探索する「安全」に分類された幼児は、見知らぬ人の前では不安で彼女を避けようとし、保護者の短時間の不在に苦痛を感じており、直ぐに保護者をさがし、接触によって安心を得、探索行動に戻る。保護者との

分離にあまり不安を感じないようにみられる幼児は、「不安／回避」に分類される。三つ目のカテゴリーは、「不安／抵抗」であり、探索行動や遊びはかぎられており、分離によって極度に不安がり、その後なかなか落ち着くことはなく、苦悩、頑固さ、泣き続け、大騒ぎをする。保護者の存在や慰めが安心を与えられない時、幼児の心配と怒りは接近による慰めを与えようとする保護者を避けようとする。「安全」の幼児の行動は良く調和された経験に基づいており、保護者が過度に刺激を与える事はまれになく、子供の乱れた感情反応を安定させることが出来る。したがって、不安になりがちな状況でも子供は比較的安定している。否定的な感情はあまり脅威ではなく、意味があり、隠し立てがない。(Grossman, Grossman & Schwan, 1986年、Sroufe, 1979年、Sroufe, 1996年)。「不安／回避」の子供は、保護者によって感情的な目覚めが確立されなかった経験があるか、直感的な子育てを通してかどに目覚めさせられていると思われる。したがって、彼らは過度に感情を規制し、不安になりがちな状況を避けようとする。「不安／抵抗」の子供は不安の表現を高めることを規制し、保護者から期待する反応を引き出す努力をする。そこには脅迫の引き金はなく、子供は保護者との接触により心を奪われるようになる。が、それが可能となってもいららとしてしている。児童の第4のグループは管理されていない行動のように見えるが、混乱と方向を失っているような印象を与える(Main & Solomon, 1990年)。奇妙な状況においてこの様なパターンをあらわす子供は、Ainsworth システム(Ainsworth, Bell, & stayton, 1971年)には合致しない。

Main と Solomon (Main & Solomon, 1986年 ; 1990年) が 200 を越える変則的な奇異な状況テープを再調査した所、子供たちのほとんどが分離のストレスとつきあう一貫した秩序だった方法が欠如しているように見えることに気付いた。たとえば、一人の子供は大声で泣きながら母親のひざにもぐろうとするが、次に静かになり、動きを数秒間止めてしまった。子供たちは安全で、回避的または抵抗的であるが(回避的なパターンと抵抗的なパターンが混ざった強いなどの) それとは反対の行動パターン(管理されていない、違った方向に向けられた、不完全かつ妨げられた行動、ステレオタイプな変則的なポーズ、凍りつき、親についての心配の直接的な表現、方向性のない放浪などの混乱の直接的な表現、困惑した表現) を症状として示す時、混乱していると分類される。症状はわずかなものだが、ほとんどの研究でのこのカテゴリーの信頼性は高い(Lyons-Ruth & Jacobovitz, 1999年 ; Van Ijzendoorn, Schungel, & Bakermans-Kranenburg, in press)。Main と Hesse によると(Hesse & Main, in press-a ; Hesse & Main, in press-b ; Main & Hesse, 1990

年)、これらの行動は指標がその警報の原因と解決である時 (Main & Hesse, 1990 年、p. 163) 起き、保護者は安心と恐れの両方を源としてつかえ、行動の体系の目覚めは強く対立した動機づけを産む。引き伸ばされ、繰り返された分離の歴史 (Chosolm, 1998 年)、激しい夫婦の対立 (Owen & Cox, 1997 年)、慢性的で激しいうつ病または両極端な病理学 (Aplern & Lyons-Ruth, 1993 年 ; DeMulder & Radke-Yarrow, 1991 年 ; Teti, Gelfand, & Isabella, 1995 年)、そして育児放棄や物質的または性的虐待は、このパターンと関連がある。(Carlsson, Cicchetti, Barnett, & Baunwald, 1989 年 ; Lyons-Ruth, Connell, & Grunebaum, 1990 年 ; Teti et al., 1995 年)。

以下において詳細に見ていくのはこの最後のグループである。行為障害における行動パターン行為障害は、保護者との安定していないという背景において一般的である。Mark Greenberg (1999 年) は、この分野の最も興味深い研究者の一人だが、「不安定なアタッチメント (insecure attachment) は、後の障害についての原因として必要でも十分でもない、また、それはいくつかのケースにおいては障害そのものの影響とも取れる」(P. 484) としている一方、不安定なアタッチメントは (異常な幼児の性格、効果の無い育児、また、家族の大きな不幸などによる) 行為障害早期発症者の 4 つも危険要因の一つである。子供の性格、親の育児方針そしてアタッチメントの確かさは、反抗的なプレ・スクール児と普通の児童についてユニークな情報の区別の診療をもたらすという証拠がある。

(Greenberg, DeKlyen, Speltz, & Endriga, 1997 年)。過程は不安定なアタッチメントが独立した危険要因であるとしている、単純累積的危険度疫学モデル (simple cumulative risk epidemiological model) が示す所よりも明らかに複雑である。このプロセスにはいくつかのポイントがある。

- (1) 不安なアタッチメントは、行為問題の直接的な原因とはなりにくい。というのも大多数のこの様なパターンの子供は、心理的な障害のどのパターンも示していないからである。実際の標本でも、子供の多数は切望したを得、(Broussard, 1995 年)、行為問題と言う結果には終わっていない。
- (2) 不安定なアタッチメントは、社会抑制不安 (Cassidy & Berlin, 1994 年)、自滅的な行為 (Adam, Scheldon-Keller & West, 1997 年)、薬物乱用 (Allen, Hauser, & Borman-Spurell, 1996 年) そして性格障害 (Patrick, Hobson, Castle, Howard, & Maughan, 1994 年) を含む心理病理学の範囲と関連がある。もしも多くの心理的障害がの不安定さと関連が在るとすれば、それがいかに実質的な説明できうる価値を保持できるか

を見るのは難しい。同様な問題は、繰り返し個人を幅広い範囲の障害を発症させやすいとされている人生におけるネガティブな事件についての論文に直面している

(Brown & Harris, 1989年)。

- (3) 精神的障害と関連する不安定なアタッチメントの存在は、必ずしも因果関係の兆候ではない。少なくとも、不安定なアタッチメントは他のものよりむしろ行為問題の結果として議論することは可能である。
- (4) 不安定なアタッチメントは否定的な感情 (Rothbart & Bates, 1998年) などの潜在する一般的原因による行為問題と共に起きる。このことは、気性とアタッチメントの両方はちがってみえるが子供がストレスを処理し、影響を規制することにおいては関連があるということを示唆している。したがって、気性を個人の性格とし、アタッチメントを関係性の反映であるとみなすのは、余りにも単純であろう。行為問題の起源に含まれるほかの原因学的な要因、たとえば精神的うつ症状 (Cummings & Davies, 1994年) などにおいても同様のことであろう。慢性的な鬱症状は、深刻な出来事よりも行為問題に含まれやすいことは、この議論を裏付けている。(Alpern, & Lyons-Ruth, 1993年; Fergusson, Lynskey & Horwood, 1993年)。
- (5) 幼児期の不安定なアタッチメントパターンを引きずった思春期の青少年や成人—関係性を重要ではないと見落とすこと (回避パターン)、または時々過去のアタッチメントの関係についてかなり怒って没頭すること (不安/抵抗パターン)—は、非行青年の診断的記述と合致する。
- (6) 最後に、もっとも深刻な行為問題と関連する破壊性は、不安定なアタッチメントよりも、孤立 (ディタッチメント) を表している。この破壊の大きな特徴は、上演であり、人間間の相互作用に関わるよりも、身体や物理的目的に向かって行動する人の前置きである。究極には個人間の暴力は、幼児期を穏やかな形で疑わしく存在する重大な構成要素を含んでいる: アタッチメントに関連して怒りを考える不適切な能力であり、それは人を親しい人間関係に関わるよりも、意地の悪い、残酷な、破壊的、弱いものいじめをする行為に走らせる。それは行為問題の最終的な一般的プロセスを示す、犠牲者の精神的状態を無視できる道理に反した能力であり、私が思うにこの能力がアタッチメントに関する行為障害につながる。

## 幼児のアタッチメントと行為問題



幼児期についての多くの研究は、行為障害、特に対立的抵抗障害（DeKlyen, 1996年；1998年；Greenberg, Speltz, DeKlyen, & Endriga, 1991年；Speltz, Greenberg, & Deklyen, 1990年）の臨床的標本におけるアタッチメントの健全さを考查してきた。これらは、比較する標本では、30%だったのに対し、臨床標本において約80%の高いレベルで不安定さを認めた。臨床標本は不安定パターンの範囲を示したところ、ほとんど一般的なタイプはコントロール型であった。このパターンは再会において両親との相互作用をコントロールする子供の試みとして特徴づけられる。子供たちは彼らの母親に対して、懲戒的で敵意または拒絶的な傾向があることは注目点であった。制御パターンは幼児の不安定で組織立っていないアタッチメントパターンの発展的変化であると考えられる（Main & Cassidy, 1988年）。これらの研究のうち少なくとも一つは、大人のアタッチメントについてのインタビューでの親のアタッチメントの分類と子供のアタッチメントとの間に高い一致を見ることが出来る（DeKlyen, 1996年）。また、行為問題のグループにおいては息子と父親間に高いレベルの不安定さが観測されたことは注意しておくべきであろう。幼児期（middle childhood）のアタッチメントの調査はまだ疑いの余地があり、これらの行為についての調査が子供たちに明らかになっている行為問題と真に関連がないかは議論しがたいであろう。アタッチメントが行為問題の発達において原因的役割を果たしているとしたら、アタッチメントの分類は長期的な研究において行為問題の出現を予見する事が期待されている。

幼児及び乳児のアタッチメントののちの社会的高危険集団における発展の影響についてのいくつかの調査がある（Egeland & Sroufe, 1981年；Lyons-Ruth, Connell, Zoll, & Stahl, 1987年；Rodning, Beckwith & Howard, 1991年、Shaw & Vondra, 1995年；Spieker & Booth, 1988年）。ミネソタでの調査ではプレスクール（Erickson, Sroufe, & Egeland, 1985年）、小学生（Renken, Egeland, Marvinney, Mangelsdorf & Sroufe, 1989年）、そして思春期前（Urban, Carlson, Egeland & Sroufe, 1991年）におけるフォローアップ調査が行われ、社会的高危険集団で保護者と不安定なアタッチメント関係にあった子供は、初期にアタッチメントの落ち着きを見せた子供に比べると、同年齢の人間関係も貧弱でうつと攻撃性の症状が見られた。

この標本における2つの最近のフォローアップが報告された；一つは17才時点、もう一つは19才のものである。17才のフォローアップ（Warren, Huston, Egeland, & Sroufe, 1997年）によると、不安障害診断はアタッチメントについては両面価値的であると分類された個人は通常の2倍で28%、アタッチメントが安定しているものは12%、回避的な

人は 16%であった。精神的な不安と幼児期の起伏の激しい気性が制御されていると、幼児期のアタッチメントは流動性のわずか4%をしめるとわかった。重要なことに心理的な問題全般とアタッチメントの安定には何の関連もなかった。2番目の報告(Ogawa, Sroufe, Weinfield, Carlson, & Egeland, 1997年)は、17才と19才の両方に障害が在ると分類された個人は高いレベルの分裂症状を明らかにした。これは、分裂障害を早期のアタッチメント障害と結び付けた多くの理論的なモデル(Fonagy, Target, 1997年; Liotti, 1995年)を裏付けている。二つの長期的な調査がやはり早期のアタッチメントの障害の重要性を強調している。マサチューセッツ州ケンブリッジにおいて、Lyons-Ruthは同世代や大人に対して敵対的であると評価されたプレスクールの児童は、生後18ヶ月において障害を来している可能性が十分あるとしている(Lyons-Ruth, Zoll, Connell, & Grunebaum, 1989年)。全般的に敵対的なプレスクール児童の71%が幼児期に障害があると分類され、わずか12%が安定していると分類された。7才時、低い知能とアタッチメント障害の組み合わせは、教師の判断では感情を口であらわす事に問題を持つ可能性がある(Lyons-Ruth, Easterbooks, Davidson Cibelli & Bronfman, 1995年(4月))。これらの障害の無い標本の5%しか同様の問題が無いのに比べて、障害のある低IQグループの50%は感情を言葉に表すことに問題がある。

ピッツバーグの長期調査によると、ShawとVondra(Shaw & Vondra, 1995年)は、3才時点で両親の判断により行動に問題があるとする予見はわずかである。5才時点までフォローしてみると(Shaw, Owens, Vondra, Keenan & Winslow, 1997年)、幼児のアタッチメント障害は程度の高まった攻撃性と関連があり、安定した子供においては17%であるのに対し、60%である。気性が単独で難しいとラング付けされ、幼児期のアタッチメントに障害のあるこどもの99%は攻撃性のある子供である。いずれの変数も攻撃性の異常度を予言するものではない。このように一般的に不安定なアタッチメントは、行為障害の危険のある子供を認定するには十分な明確さはないが、幼児期のアタッチメントの障害のパターンは十分にリスク要因となりうる。社会的認知のための能力の決定要素としてのアタッチメントアタッチメント理論(Attachment Theory)は両親との早期の経験は、いわゆる「internal working model」(内的作用モデル)に仲介されるその後のすべての関係の原型をもたらす(Bowlby, 1973年; 1980年)。成人アタッチメントについてのインタビュー(Adult Attachment Interview, "AAI")(George, Kaplan & Main, 1985年)は、Strange Situation classification(異常状況分類)に類似した、これらの分類を提供す

るために設計された。調査は、子供時代のアタッチメント関係の歴史を直接語るようにしている。

AAI Scoring System (AAI 点数法) (Main & Goldwyn, 1994 年) は、個人を喪失やトラウマの観点から安定/自律性の、不安定/喪失、不安定/うわの空の、未解決に分け、カテゴリーは、早期の時期の経験の物語の構造的質に基づいて分類した。自律性の人、アタッチメント関係を重んじ、四尾一貫して思い出を意味のある物語、そして肯定的に結び付けるが、不安定な人はその経験の意味を考えて思い出を集約する事が不得手である。これらアタッチメントの喪失は、記憶を否定すること、また、早期の関係を理想化したりあるいは価値値を減じたりして(ときにその両方をして)、回避を示す。上の空の人はアタッチメントの関係について、困惑、怒り、消極的になりがちで、幼児期の軽蔑について不満を述べ、反抗的な児童の抵抗を繰り返す。未解決の人は、彼らのアタッチメント関係の表明に重要な障害を示す; これらの表明は彼らの子供時代のトラウマや最近の損失についての物語において、意味論的または統語論的な混乱を伴う。アタッチメントパターンは幼児期より不変で、世代をまたがって移動する。安定した成人は安定して彼らにアタッチメントを示す子供を 3・4 倍も高い確率で持つ可能性がある。(van Ijzendoom, 1995 年)。これは子供の誕生前に両親のアタッチメントが評価されている場合においても当てはまる (Steele, Steele, & Fonagy, 1996 年; Ward & Carlson, 1995 年)。アタッチメント理論にたつ研究者は、安定したアタッチメントを持った成人は、子供たちの要求に対してより敏感で、子供の期待を育て、統制に外れた事は迅速かつ効果的に満たされると仮定した (Belsky, Rosenberger, & Crnic, 1995 年; De Wolff, & van Ijzendoom, 1997 年)。残念ながら、保護者の感受性による標準的な方法は、アタッチメント分類におけるよく世代を超えた一貫性についての説明を与える様ではない。(van Ijzendoom, 1995 年)。Mary Main (1991 年) と Inge Bretherton (1991 年) の二人は、哲学者 Dennett のいう「intentional stance」(意図を持ったスタンス) について個別に注目し、もう一つの見方を提供した。Dennett (1987 年) は人間はお互いを理解し、より重要な事にお互いの行動を予測するために思考、感覚、信念、欲望などの精神的状態をお互いに理解しようとするものであることを強調している。もしも、子供が鈍感な母親のあからさまな拒否の行為を直面して単純に仕方なく感じるよりも、母親の喪失感からの悲しみが原因とすることができれば、子供は混乱や自己を否定的に見る事より守られる。意図的なスタンスの性質は行為は間違っただ信念に基づいたのだろうという、子供のだいたい 3~4 才時の認識である。

分担研究（レビュー研究）

## 9. 虐待防止の観点からの文献紹介

（分担研究者 山田 和子）